

西成を外国人客の街に

表題は日経新聞 1 月 10 日朝刊「ひと協奏」である。大阪西成には関心があり、東京の「山谷」地区と同じような動きであり、要約しておきたい。

日雇い労働者の街「あいりん地区」で知られる大阪市西成区が、訪日外国人の個人旅行者(バックパッカー)の一大拠点に変貌している。1泊2千円前後の簡易宿泊所(簡宿)が人気を集める。西成に新しい風を吹き込んだ1人が阪南大教授、松村嘉久だ。「中にバックパッカーのカナダ人がおるから」。松村は昨年11月、国際観光学を指導する講座のフィールドワークで学生約10人を連れ、簡宿「ホテル東洋」を訪れた。「宿代が安いだけやない。昭和の下町情緒が残る独特の雰囲気も魅力なんや」



調査を通じ旅館業や飲食業の多くが、経営の危機に直面している現状を知った。バブル崩壊や大阪経済の地盤沈下で、西成にかつて最大約3万人いた日雇い労働者は数千人になり、簡宿などの利用者も減った。「街には労働者に代わる新たな活力源が必要だ」。松村が目をつけたのがバックパッカーの存在だった。粘り強い活動は05年から実を結び始める。松村の呼びかけに応じた若手の簡宿経営者らと「大阪国際ゲストハウス地域創出委員会」を結成。「バックパッカーはロコミで集まる」との経験に基づき、海外のロコミサイトに情報を掲載した。

「観光案内所」をつくろう」。09年1月、簡宿の一角にバックパッカーからの相談を一手に引き受ける案内所を設置。松村ゼミの学生らが協力し、週末や長期休暇中に運営する。過去7年間でノート41冊分、約2万人の相談に応じた。地道な取り組みの結果、西成区内の簡宿に宿泊する外国人客は急増した。集計に協力する8~9軒分だけで、04年の約9200人から、14年は約15万人弱に。未集計分も含めた推計では20~25万人に上る。

次の課題は飲食業などの活性化だ。積み上げた相談内容から外国人客のニーズを分析。学生が付き添う「まち歩きツアー」を企画したほか、ガイドブックには載らない魅力を紹介する「食べ歩きマップ」も作成した。「もともと西成は様々な人々を受け入れてきた懐の深い街。集まった外国人客を通じて再生を果たしたい」。松村の視線は常に前を向いている。

(2016年1月15日)